

作文添削過程における使用言語のプロトコルへの影響 —日本語と中国語による思考発話法の比較—

龔 雪(麗澤大学大学院生)

1. はじめに

近年、日本語教育において、ピア・レスポンス（以下、PRとする）の研究が進められている。PRとは、作文プロセスの中で学習者同士の少人数グループでお互いの作文について書き手と読み手の立場を交換しながら検討しあう作文活動である(池田, 2002)。

これまでのPRに関わる実践報告を概観したところ、目標言語である日本語で行うことが主流であったが、池田(1999)によれば、話し合いにおいて、内容に関する話題があまり取り上げられなかったことから、日本語による言語能力に制限があったことが示されている。当該研究をきっかけとして、使用言語の相違がPRに与える影響が注目されるようになった(広瀬, 2000, 2004 ; 田中, 2006等)。母語に関する研究では、PRに取り上げられた話題(内容・文法・構成他)については明らかにされたが、学習者の話し合いの質が、言語によってどう異なっていたかまでは示されていない。そもそも、他者の作文を読みコメントをする際に、コメント(アウトプット)の面だけでなく、内容理解においても制限があるのではないかという問題提起に至った。使用言語がPRに与える影響を探る前段階として、作文推敲過程において、言語の違いが読み手個人の内的プロセスにどう関与するのかに焦点を当てる必要があるのではないだろうか。読み手個人の内的認知プロセスが読みの過程に与える影響も見必要があると考える。

2. 先行研究と研究目的

個人の読みの過程を分析する方法として、作文や読解研究では思考発話法がよく用いられている。個人の読解過程においては、母語話者と学習者の言語能力の差がテキストの読解過程に与えた影響を明らかにした研究がある(森, 2000)。また、日本語学習者のみを対象とし、被験者に読みの目標(「伝達目標」及び「批判目標」)を与え、日本語による読解力が中級及び上級である読み手の読解過程を「メタ認知」と「認知」の側面から検証している研究もある(封, 2013)。この二つの研究は、学習者の言語能力の差や読解力の差・読みの目標の違いが読解過程と理解に与えた影響を明らかにしたが、思考発話法において使用言語の指定はされなかった。母語と目標言語それぞれを用いた場合の読解過程について明らかにした研究は、管見の限りではなされていない。

そこで、本研究では、PRにおける使用言語の影響を探る前段階として、まず個人の作文推敲過程におけるプロトコルに注目することとした。同じ学習者が中国語もしくは日本語を用いて他者の作文を添削する場合、読み手としてそれぞれのどのような内的認知プロセスが見られるのかを探ることを目的とする。

3. 研究方法

本研究では、中国語を母語とする上級日本語学習者女性2名(W及びJ)を被験者とした。2名とも日本の大学院生で、日本語能力試験N1合格者である。以下、実験の流れを①実験前、②実験中及び③実験後に分けて説明する。①実験前、研究目的の説明をしてから、約50分の思考発話法の練習を行った。②実験中、被験者W・Jに本実験用作文(「スマホの是非」800字程度)を渡し、推敲する過程において、思考を日本語で発話するよう依頼

した。記憶を薄めることや言語間の干渉をできるだけ避けるために、中国語による実験までは6週間の期間を置いた。③実験後、発話意図を確認するために、録音した発話データを聞かせながら、再生刺激法によるインタビューを行った。また、実験に関する感想を聞くために、フォローアップ・インタビューも行った。

分析方法は、作文推敲過程の内的認知プロセスを行動単位に分け、質的分析によって読み段階の行動の分割及び意味概念を付与した「読解における行動範疇」(封, 2013)を参考にした。また、本研究では、実験用作文を読ませながら、該当する作文をよりよくするために添削するという課題を課したため、龔(2020)を踏まえ、「指摘」という行動範疇を追加することにした。

4. 結果と考察

各言語による各被験者のプロトコルを質的に分析したところ、各言語における「行動連鎖」「論理的思考」及び「指摘の具体性」に顕著な相違が見られた。なお、本研究における行動連鎖とは、作文の推敲を進める上での一連の行動の連続体、例えば、【評価】【点検】など「行動」(封, 2013)のつながりを指している。

4.1 行動連鎖の相違

「行動連鎖」に関して、被験者Wが作文の同一箇所を推敲しているが、言語による違いが見られた。例えば、「スマホが様々な便利をもたらした同時に、大勢な問題も行ってきた。例えば、スマホ依存症、人間との交流能力低下(コミュニケーション能力).」という文(実験作文)を推敲する際に、行動連鎖が異なることがわかった。中国語によるものを〈例1-1〉で、日本語によるものを〈例1-2〉で示す。

〈例1-1〉中国語によるプロトコル〔筆者訳〕

- 45 「スマホが様々な便利をもたらした同時に、大勢な問題も行ってきた。例えば、スマホ依存症、人間との交流能力低下。」 【読み】
46 まず、「例えば」の後ろの文は整っていないような気がする。「スマホ依存症」と「人間との交流能力低下」が名詞で終わっているが、作文では文になるべきだ。 【言語形式 表現の適切さ】
47 これは作文で、レジюмеではないからだ。簡単に書けばいいということではない。やっちはいけないことだと思う。【評価 意見・感想】
48 そしたら、前の文で書かれていることは、スマホが様々な便利をもたらしたと同時に、ということだ。 【意味明確化 言い換え】
49 「便利をもたらす」この表現は正しい？ちょっと疑問に思う。 【言語形式 表現の適切さ】
50 人狼ゲームみたい(笑) 【評価 意見・感想】
51 その次は、多くの問題も生じている。 【意味明確化 言い換え】
52 うん、「問題も行ってきた」こんな組み合わせがある？ 【言語形式 表現の適切さ】
53 どう直すかをちょっと考えさせて。 【調整 進み方の選択】
54 「スマホが人間生活に様々な便利を得て、生活には便利であるが」、次に、様々な問題がある？ ちょっと考えさせて、この文は他の文に変えてもいい。簡単に表現したほうがいいのかも、いろいろな問題がある」のほうがいいのかと思う。 【言語形式 表現の適切さ】
55 彼はスマホ依存症の次に、スマホ依存症とは何かを述べている。 【背景知識・経験の活用 文章構造の知識の利用】

〈例1-2〉日本語によるプロトコル

- 38 「スマホが様々な便利をもたらした同時に、大勢な問題も行ってきた。」 【読み】
39 いろいろな問題があるっていいかな。 【言語形式 表現の適切さ】
40 「例えば、スマホ依存症、人間との交流能力低下。」 【読み】
41 スマホ、でも、これは「スマホ依存症、人間との交流能力低下」このまま終わるちょっと、足りないかもしれない。 【言語形式 表現の適切さ】
42 「スマホ依存症、例えばスマホ依存症と人間との…」 【読み】
43 例えば、スマホ依存症とコミュニケーション能力の低下がある。例えば、例えばじゃなくて、次にスマホ依存症は何かを具体的に説明したほうがいいのか。 【内容 例示・アイディアの提示】

中国語の場合は、被験者が下線部の原文を【読み】、それから【言語形式】→【評価】→【意味明確化】→【言語形式】→【評価】→【意味明確化】→【言語形式】→【調整】→【言語形式】→【背景知識・経験の活用】

といった10の行動連鎖を通して思考を巡らせていたのに対し、日本語の場合は、被験者が下線部の原文を一文【読み】、それから【言語形式】の訂正へ、また次の文を【読み】それから【言語形式】の訂正へ、【読み】→【内容】の訂正へのような単一の言語使用をしており、理由や感想まで言及できず、一文ずつ読んで直すという進め方を取っていた。W及びJのプロトコルから行動連鎖を分析したところ、中国語では上記のような5つ以上の行動連鎖が見られたのは、Wが7回、Jが5回であった。これに対し、日本語によるプロトコルはWもJも5つ以上の行動連鎖は全く出現しなかった。

4.2 論理的思考力の相違

行動連鎖をさらに質的に分析すると、メタ認知による点検においても相違が見られた。点検は両方共通した行動であったが、同一箇所であっても、プロトコルが著しく異なっていることがわかった。下記に、Jのプロトコルを提示しながら、点検における相違について述べる。Jは原文に書かれている「例えば、スマホ依存症、人間との交流能力低下(コミュニケーション能力)」について、両言語ともに自分の見解を述べている。この文に関する中国語と日本語によるプロトコルを〈例2-1〉〈例2-2〉で示す。

〈例2-1〉中国語によるプロトコル〔筆者訳〕

- 13 それから、スマホ依存症、人間交流能力低下。
【意味明確化 言い換え】
- 14 「スマホ依存症」と「人間交流能力低下」は並列問題なのか、それとも「人間交流能力低下」がスマホ依存症から生じた問題なのか。
→【点検 問いかけ】
- 15 主にスマホ依存症について述べている。それから、人間交流能力低下はスマホ依存症によって引き起こされた問題のはずだ。
→【点検 検証】
- 16 そしたら、ここは句読点ではない。スマホ依存症が人間交流能力低下の問題を引き起こした。【言語形式 表記漢字、句読点などの訂正】

〈例2-2〉日本語によるプロトコル

- 25 最初の問題は「スマホ依存症、人間との交流能力低下」
【意味明確化 言い換え】
- 26 オーケー 【調整 進み方の選択】
- 27 スマホ、オーケー、だから、依存症を詳しく説明するのは…
【内容 例示・アイディアの提示】
- 28 その人の生活にスマホがもはや空気や水みたい、不可欠なものようになっていた。 【読み】

中国語の場合は、被験者が作文の内容を理解するだけでなく、【検証】や【問いかけ】といった点検をしながら、内容の不足部分を補ったり、不適切だと思われた箇所について自分の考えを述べていたり、書かれていること以上の何かを読みとる行為も観察された。要するに、中国語によるプロトコルでは、被験者のメタ認知(モニタリング)がより活性化し、添削という問題解決に至る思考が活発となり、関係性や原文の論理性を推論しながら発話していたことが複数観察された。一方、日本語の場合は、被験者が文章の前後関係や関係性などには触れず、作文に書かれていることのみと言及する傾向が見られた。たとえ自分の頭の中で内容を掘り下げたり、展開をしようとしても、途中で止めてしまったり、言いたいことがうまく表出できなかったことも確認された。このことから、日本語より中国語の方が「論理的思考力」が活性化していると解釈できた。

4.3 指摘の具体性の相違

指摘を質的に分析したところ、指摘のやり方に関して相違が見られた。指摘のやり方には「直接的な指摘」及び「間接的な指摘」がある(龔, 2020)。「直接的な指摘」とは、読み手が「「伝播」を「伝達」に変えましょう」のような直し方を具体的に例示するもので、「間接的な指摘」とは、「もう少し詳しく説明した方がいい」のような相手に考える機会を与えるものを指す。それに倣い各被験者のプロトコルを分析した結果、「言語形式」及び「構成」に関しては、言語による相違が見られず、いずれも概ね「直接的な指摘」によって作文を添削していた。しかし、「内容」に関しては、言語による相違が見られた。各言語による直接・間接的な指摘の出現数を表1で示す。

表1 内容に関する直接的・間接的な指摘

被験者	指摘の方法	中国語	日本語
W	直接	8	0
	間接	1	6
J	直接	5	0
	間接	1	3

中国語の場合は、直接的な具体性を伴う指摘が多く、前後の文脈に合わせて直接的に例示・アイデアを提示していることが観察された。一方、日本語の場合は、「～したほうがいい」や「どのように～」をはじめとした間接的な表現が多数使われ、一見アイデアの提示をしているように見えるが、具体性が欠けており、どのように直すかまでは言及していないことがわかった。また、被験者が指摘を試みても、「もっと人はどのように、えっと、うん...」や「どのように情報を集めるのかは...」など代替案が思いつかず、指摘がしきれていない場面が9回見られた。このことから、被験者の言動と思考が必ずしも結びついていないことや、具体性が伴う指摘をすることに限界があることが明らかになった。

5. おわりに

本研究により、上記の「行動連鎖」「論理的思考」と「指摘の具体性」で見られた特徴から、母語のほうが他者の作文を深く掘り下げて添削をすることができ、より良い作文にするための解決策を提供できる可能性が高いことが示唆された。前述のとおり、日本語教育のPRは日本語で行われることが多いが、言語によりプロトコルの質に大きな違いが見られたことやフォローアップ・インタビューから、PRの活動の目的に応じて使用言語を選択することが重要だと考えられよう。

参考文献

- 池田玲子(2002). 第二言語教育でのピア・レスポンス研究—ESLから日本語教育に向けて— 言語文化と日本語教育, 5, 289-310
- 池田玲子(1999). ピア・レスポンスが可能にすること—中級学習者の場合— 世界の日本語教育, 9, 29-43
- 広瀬和佳子(2000). 母語によるピア・レスポンス(peer response)が推敲作文に及ぼす効果—韓国人中級学習者を対象とした三ヶ月間の授業活動をとおして— 言語文化と日本語教育, 19, 24-37
- 広瀬和佳子(2004). ピア・レスポンスは推敲作文にどう反映されるか—マレーシア人中級日本語学習者の場合— 第二言語としての日本語の習得研究, 7, 60-80
- 田中信之(2006). 中国人学習者を対象としたピア・レスポンス—ビリーフ調査から話し合いの問題点を探る— 小出記念日本語教育研究会論文集, 14, 21-35
- 森雅子(2000). 母国語および外国語としての日本語テキストの読解—Think-aloud法による3つのケース・スタディー— 世界の日本語教育, 第10号, pp. 57-72
- 封静宜(2013). 読みの目標が読解過程と理解に与える影響—読解指導の応用に向けて— 名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学術論文
- 龔雪(2020). 使用言語に着目したピア・レスポンスにおける話し合いの様相—中国語と日本語による比較から— 言語と文明, 18, 63-82